

## 私の愛する万葉歌人たち

大岡 信

こんにちは。前置きをしていると、それだけで終わってしまいますから、なるべく早く本題に入りますけれども、その前に、私は上代文学会にこういう形で呼んでいただいで話をする機会を与えられるなんていうことは、実はある意味でいえば恐ろしいことをやっているというふうに思っております。今、小野先生のご紹介にあったように、私の友人の一人は、稲岡君なんです。稲岡君の万葉集の研究というのは、学生の頃は私はそんなに詳しく知りませんでした。というのは、大学の頃はほとんど行きませんでしたので、誰が何をやっているかなんて、そんなことまで知らないで……。ここの常葉の先生のおひとりである長田さんも、実は同級生なんです。万葉の植物について非常に詳しく、この裏に植物園を造られているのは長田さんなんですけれども、この方も私は同級生なんですが、長田さんも大

学にいたときにたぶん一度も顔を合わしていない。というのは私、なにしろこの学部に所属しているかわかんないような、ほんとのコウモリ学生でした。自分の気に入った授業にだけ出ているというわけでもなくて、ただなんとなく大学へ三年間通ったということ、その間に同人雑誌をやっていた。その時の同人雑誌の仲間は旧制高校の時から仲間だった日野啓三君ですね、今小説家になっています。推理小説作家の佐野洋君も同級生です。日野君は一級上だったんですけど、ま、いずれにしてもそういう仲間と大学へ行って、落ち合って、そのまま喫茶店へ行って編集会議などをやったというのが、実は大学へ通ったということの実態でした。卒業すると読売新聞の外報部に入り、以後ずうっと学問の世界の外側にいるつもりでいたんですが、知らず知らずのうちに万葉集をはじめとしているんな

ものに興味を持つもんですから、それでいろいろ、書きました。専門の方々からすれば、ほんとに噴飯物のことも多いぶん書いていると思いますけど、私が書いているのはなぜかといったら、日本語が好きだからです。日本語が好きだ、という理由しかありません。その日本語が好きだという意味でいえば、万葉集も、古今集も、新古今集も、全部同じです。時代によって表現の質や何かは大変違いますけど、それぞれの時代に合わせてみれば、どの時代の、どの文学作品も、必ずいいところがあるんですね。私はそのいいところばっかりいただいて、食べているような、まあ非常にずうずうしい男です。

今日は万葉集の、自分の好きな歌人たちという題を、もういぶん前に申し上げたんですけども、ずっとそのままで来ちゃったんですが、この間改めて考えてみたら、それしゃべったら何時間もかかる、困ったなあと思いました。話題を究極的には絞ろうと思えますけども、その前に題名をこういうように掲げたもんですから、どんな万葉歌人が好きかってことをちよつと申し上げておくほうがいいかもしれません。ただ、これはどなたともみな同じだと思えます。やっぱり一番、好きというよりは、こいつだけはまったく現代の詩人としてこれを見て、私にはとてもかなわねエ、という人がいます。もちろん柿本人麻呂です。この

人は、古代のある時期に生きていた人であることは確かですけども、同時に、この人の詩は、時代を超えている、そういう確信に近いものを、ずうつと持ち続けています。まあどこが偉いかというと、万葉集で相聞と挽歌というのは、二つの大きなテーマですね。つまり愛と死です。この二つのテーマの両方において、日本の詩歌史を通じて最大の存在は、まあこの人だけではないと思いますが、でもやっぱり、絶対にその地位が動かないのは、人麻呂だと思えます。人麻呂は愛の詩についてだけではなくて、死の詩についてすばらしかったということが、この人をすごいな、現代の詩人だな、というふうに思える理由なんです。それ以外にもたとえば旅の歌。あの人ほどにすぐれた旅の歌を書けた歌人はいません。そういう意味では要するに万能の詩人だと、いうふうに言っていると思います。もつと別の意味で言えば、技術的な、優れた素質、つまり比喩の使い方とかですね、あるいはことばの、構成の仕方とかそういう、つまり詩人として優れているか優れてないかの、別れ目になるのはその問題ですけど、これにおいて、非常に優れてる。要するに技術的に非常にしつかりしてた。技術がしつかりしてれば、詩は書けるんです。と言っても、詩の心がなければ全然意味ないですけど、詩の心があって、詩の技術があつたら、これはもう鬼に金棒、というような

もんですね。そういう人は、ひとつの世紀に一人か二人しか出ないと思いますけど、そういう人だったと思つてます。柿本人麻呂歌集つてございますね。稲岡さんの文章などで今どんどんわかつてきていることがあると思いますが、柿本人麻呂歌集つていうのはですね、ひよつとしたら人麻呂の作でない歌がたくさん入つてるかしらん、という、人麻呂編のアンソロジーですね、要するに。柿本人麻呂の編んだ歌集だと言つていいんですけど、その歌集の中には、人麻呂の作も、当然あるはずですけど、それ以外に女性、明らかに女性が書いた歌もありますから、そういう意味では、かなり複数の作者たちが作った歌を、柿本人麻呂という人がある時期に、まとめておいてくれた。それを万葉集の編者たちがまた利用して、何百編も、入れてるわけですね。これがまたすばらしくいいつてこと。他の、いろんな歌人たちの編んだアンソロジーのようなものが、万葉集では利用されていると思いますけども、その中で、柿本人麻呂の編んだ人麻呂歌集だけはちょっと別格だと思つてます。これは根拠のない推測にすぎませんが、私は人麻呂歌集つていうひとつのアンソロジーができあがるまでの間に、最終的には筆記した人麻呂が、彼らしいやり方で、少しづつ改変、あるいは修正して載せてるんじゃないか、という不敬的な考え方を持つてる人間でして、つまりそ

れどういう意味かというと、仮に原作者が他の人であっても、人麻呂歌集に集まつてる限りにおいて、人麻呂の作つたもんだと考えてもいい、いいじゃないかというくらいに、思つている人間です。というのは、つまり人麻呂歌集に載つてる歌は、他の作者たちが作つたいくつもの歌集から採られた歌とは違う、ちよつと風格が違うというふうに思つています。仮にどつかの、名前も知られていない女性が作つた歌であつても、人麻呂歌集に載つている限りにおいて、人麻呂の作と見ても、いいんじゃないかというくらいに思つてます。著作権を重んじる近代の考え方からすると、私のような考え方はけしからん考え方です。でも私は作者の権利をあまりにも主張する考え方には、必ずしも同調できないのです。作者の権利をあくまでもこれは俺の作だとか、私の作だとか、言い続けている間は、その文学は、どうもこの、なんていいますかね、個人を乗り越えてしまつてどこかへ突き抜けるような、そういう広がりをもつた大きなものにはならないんじゃないかという、これも不敬的な発言ですけど、そう思つてる人間で、ですから作者は人麻呂でいいじゃないか、というくらいに、思つてるわけですよ。

人麻呂のことばかり言つててまずいから、他の人のことも言いますと、人麻呂に次いで非常に尊敬して好きなの

は、山上憶良です。憶良という人は、伝記的にいろいろなことがあるようですが、要するに作品としておもしろいんです。どうおもしろいかというと、人麻呂には叙情性が非常に豊かにありますけど、それは山上憶良の叙情性とは全然違うと思うんです。憶良のは人間が人間に対して感じるものの感じ方、それを非常によく教えてくれる。一方、人麻呂の作というのは、もっと人間を超えたところまで突き抜けてゆくとところがあるんですが、憶良は、人間の限界の中にふみとどまり、できる限りのことをした人というふうに思えてならない。憶良の歌の長歌には、中国の、仏典を初めとして、儒教その他、通俗小説の断片までちりばめるように引用しているのが多いです。私が興味持つのは、憶良って人は、数字を好んで使ってますね。一とか二とか、八とか、まあそういう類の数字をたくさん使って、数字でものを言おうとしているところがある。数字でというよりは、数を盛ったことば、たとえば「四生」「三界」「二つの鼠」などのように数字をたえず詩の中で使う人は、理屈っぽいわけですね。で、理屈っぽさというのは、あの当時の歌にあつては最も新しいところへ行っていた人だと思えます。日本人は昔から今に至るまで、数字あるいは数学的な思考を詩と結びつけることを、あまりしてないと思うんですが、その数少ない例外の一人が山上憶良です。憶

良は数字を頼りにして詩想を展開していくことができた。これは現代の人間として非常に興味があるんですね。数字を使つてということは、頭が論理的にできてないときません。論理的な頭を使つて詩を書くんです。現代の日本人だけではありませんけどとにかく日本人は、近代以後特にそうだと思いますけど、詩というものをですね、数学的なものとは正反対のものだと思つているところがありますね。つまり詩人はぼうつとしてあいまいな頭の世界に生きていて、それがかえつていいんだつていうようなつまらない誤解が非常にあります。それにはいろんな理由があり、言い出したらまたそれだけお話がつきないことになつちやいますからやめて、そのことだけ申し上げれば、要するに、数字を使つて詩を書けるということ、はつきり自覚的に実践した非常に数少ない古代の詩人で、同時に近代的・現代的な意味を持つていた詩人であると思つてるんです。

それと対照的な立場にいたのは大伴旅人ですね。旅人は、憶良の上役になりますけど、漢文の上では、当然、憶良に教わつたこともずいぶんあつたんじゃないかと思えます。旅人の書いたものを見ると、漢文で書いてるものもあるわけですね、万葉仮名でなく漢文で書いてる作品があつて、私の考えでは、旅人は自分の心にある叙情的な気持をより

正確に表現するために、漢詩・漢文を必要とした人だと思  
うんです。そもそも頭ん中が整理されてないと、漢文での  
は書けないだろうと私は思うんです。大和ことばだつて書  
けることは書けるけれども、大和ことばに比べるとずっと、  
頭の論理的明晰さを必要とするのが漢文だと思ひます。そ  
の漢文を使つても彼は書こうとした。

そして、この人はいくつかのおもしろい試みをしていま  
す。ひとつは自分の夢を書こうとした。たとえばすばらし  
い琴があつて、その琴が夢に出てきて自分にこういうこと  
を言つたと。つまり私はすばらしい琴だが、この私をあの  
すばらしいお方のところへ贈つてあげてくださいといつた  
というんですね。で旅人は藤原房前に、その詩をつけて、  
献上してます。旅人はこれはすばらしい琴ですと直接言わ  
ずに、夢の中で琴のおとめが出てきてそう言ひました、そ  
の琴です、と言つて、自分が琴を献上したいと思つてる人  
に、献上してるわけですね。そういう手の込んだやり方を  
してる。でこれは日本琴の場合だけでなく、松浦河で  
すてきな仙女たちと話をした、という物語も一編の長い詩  
になつてますね。短歌も、ありますけど、こういう、ある  
意味では文学的な「仕掛」を好んで作つてるんですね。夢  
に語らせることによつて、自分の言ひたいことを、より文  
学的に、きれいに、表現できる。そういうやり方をしてる。

日本の古代文学にはもちろん、中国文学の影響が非常にあ  
ります。夢の話なんてのは、中国文学の影響がなければ、  
絶対出てこなかつたと思ひますけど、そういうものに非常  
に関心を持つていた。

それだけじゃなくて、息子の大伴家持も、やつぱり夢の  
ことを書くんですね。彼は、四年ばかり越中の長官として  
行つてますけど、その間にとつてもかわいがつてる鷹をぼん  
くらな鷹匠のおっさん、季節が冬であればよかつたのに、  
秋のうちに、訓練しに行きますと出かけていき、そのまま  
鷹に逃げられちゃつたのです。家持がかんかんに怒つて、  
その爺さんを罵つた長詩を書いてます。実は私は、この詩  
を書いたときから、大伴家持は本格的な詩人になつたと思  
つてるくらいなのです。私の言うことはたぶん独断と偏見  
に満ちてますが、その時彼は、思はず我を忘れちゃつたん  
ですね。とても美しく強い鷹を、ぼんくらめが逃がしちゃ  
つたんで、このくそ爺と怒つてるわけです、かんかんにな  
つて。でその詩は、彼がそれ以前に書いた長編の詩、長歌  
と比べると、よそゆきの堅苦しいところがとれてるんで  
すね。頭にきちゃつて書いてるわけですが、その頭にきた  
ところが初めて、詩のいい部分になつて出てるんです。つ  
まり、彼を抑制している心の枠が、ぼーんとはずれちゃつ  
て、怒りにまかせて書いた、そこがとてもいい。おまけに

鷹が逃げて行つた地形やなんかも全部頭に入ってます。氷見を中心にした高岡周辺のあたりを、鷹が悠々と舞つて行く姿まで、もう夢にまで見てしまします。それを長歌の後半で書くわけです。それがいいんですね。初めて彼は、あゝ詩とはこういうふうに書けばいいのだ、とわかつただろうと私は思ってます。家持が隣にいるみたいなこと言ってますけど、私にはそういう具合に思う癖があるものですからお許し下さい。とにかく私はこのときから大伴家持は詩人としての殻がひとつ破れて、新たな出発を遂げたと思つてゐるのです。そしてここでも、肝心なところで夢に出てくるとおめがいます。彼女は神様の使いなんです、あなたがそんなに求めているあの逃げた鷹は、一週間以内に戻つて来るでしょう、早ければ三日ぐらい、てなことを、言う。それで家持は目が覚めて、夢中になつて喜んでですね、一気呵成に作つたのが、この鷹匠を罵る詩なんです。夢が最後にばーつと出てきて夢で解決しちゃうんですね。現実には、鷹はついに戻つてこなかったわけですが、でも鷹は戻らなかつたけれども、ひとりの詩人がはつきり誕生したといつていくくらいだと思う。そういう意味で、家持という人も、非常におもしろい。万葉集の巻十七からは後は、家持の、日記みたいなものですから、そこにはほんとにいろいろ、個人的な、おもしろい体験談がいっぱい出てきます。

好きか嫌いかというようなことを超えて、私にとつてはお友達という感じなんです。

大伴家持についてしゃべり出すとまたたいへんなことになるから、やめますけど、少なくとも彼の女性関係というのは非常におもしろい。今後の、研究に期待できる所だと思つてゐるんです。ただ、データの、そんなに細かいことはよくわからないかもしれないですけど、まあその限りにおいて言えば、家持の女性関係は、おもしろいと私は思つてるんですね。一番最初に恋をした女性は、彼のおばさんの大伴坂上郎女だと思ひます。つまり、彼が十歳になる前から知つていた女性ですね。郎女という人は、珍しいくらい、まあ言つてみれば平安朝の和泉式部に匹敵するぐらいな美女だったかもしれない。そして歌を作る能力が非常にあつて、いろんな人の歌のパロディーみたいなものも作れたし、男を手玉に取ることも十分にできた人だと思ひます。ですから、あの土屋文明さんその他、アララギ系の人たちは、だいたいおしなべて、坂上郎女は嫌いだと思ひますね。あの方々は謹厳な方々で、郎女については評価が低すぎるくらい低い。しかし坂上郎女に対する私の愛情は反対に強いんです。この人と、甥の家持との関係は実におもしろいですね。家持と郎女と双方が、手紙をやりとりするときなど、恋人に贈つてゐる恋文としか思えないよ

うな真情こもった歌を、たくさん残しています。坂上郎女が万葉集に最後に登場するのは五十五、六歳ぐらいであったと思いますが、この人の歌には、まあ手の切れるような味を持った一流の歌っていうのは少ないんですね。そのかわり、作者の手柄が、全体として非常に分厚く伝わってくるという意味では、万葉集の女流歌人の中でもまずこの人でしょう。

二番目にくるのはもちろん、歌人としては最高だった、と思いますけど、いうまでもなくあの笠女郎ですね。この人も私は非常に好きです。この人にも不思議なことに夢の歌がいくつかあって、それは全部セクシャルな夢と解釈すればできる夢ですね。夢に垂直に立った刀が出てきたりする。これは明らかに男性的なシンボルですが、そういう意味では、笠女郎は家持に拒絶されてしまったがゆえに、セクシャルな意味ではいろいろな悩みがあったんじゃないかと。悩みということはないけれど、ちよつとねじれた気持ちではないかと思えますね。それが不思議なことに、夢の歌になって残っているところが、たいへんおもしろい。しかし歌びとしての能力で見ると、この人は、とにかく万葉集の男・女全体含めて、トップランクの一番上の方にいる人だと思えます。その人が家持にふられてしまった。彼女の歌の最後に二首ばかり、ふるさとへ帰って

からの歌があるんですね。ふられたあと、奈良の都からどこか自分の故郷へ帰ったということは、かなり私にとってはショックなことです。かわいそうに、と思います。田舎から家持に、悲しい歌を二首贈ってきた。その歌をまた家持は、万葉集に記録しちゃったわけですね。万葉集にある笠女郎の歌は、最も秘密にしておきたい、秘め事の歌ばかりなのに、それが万葉集に収録されちゃった。収録されたとたんに、万葉集で最高の、と言っていると思います。が、女の恋の歌人という名声が残ることになった。しかし彼女は個人的に言えば、非常につらい生活をしたのだといわねばなりません。

家持のもうひとりの恋の相手として私がおもしろいと思ってるのは紀女郎という人ですね。紀女郎という名前の人が何人かいるんですが、家持との関係で言えば、家持と交渉があつた紀女郎は、ちよつと年上の女ですね。笠女郎も、家持よりちよつと年上だったと思えますが、紀女郎の方は、まあ確実に年上ですね。彼女にはそれ以前に、他の人とのラブ・アフエアーがあつて、いい歌を作っている。夫に、嫉妬した歌などもあります。その人が独り身になって、家持と知り合い、家持の方からたぶん接近したのだと思えますけれど、紀女郎とは、他の女性たちに対して与えた歌とは違って、非常にリラックスして作っています。私の考えで

は、紀女郎という人は、女性として成熟した人で、話はおもしろいし、いろんな意味で魅力があつた人だと思ひます。家持と歌の上で交渉のあつた女性たちというのは十数人もいますが、中で一番濃厚な恋愛の歌を作れたのは、紀女郎との場合だけだつたと思ひます。紀女郎とは、かなり深い親密な関係があつた。場合によつては、紀女郎の家の屋根を葺き替える、しかも、草ではなく板葺きの屋根にしようということがあつて、その時の家持の歌を見ると、板を作り、屋根を葺いたりするのもやつてあげよう、私を奴隷のごとくに使つてくさいということまで歌つてます。そして、最後に、昨日は私をそのまま帰してしまつたが、今日はおあなたの所に泊まつていけるでしょうね、という歌がついてる。これは非常におもしろいですね。古代の女と男の關係を知る上でもかなりいろんな、微妙なおもしろさを持つた歌が、紀女郎との交渉を通じて家持の方にある。紀女郎にはもつと露骨に、優位に立つてゐるということわざをわざと言つてゐる歌があつて、これは非常に有名な歌ですね。

紀女郎、大伴宿禰家持に贈る歌二首

戯奴わげ変かへしてわけと云ふいがため 我あが手もすまに 春の野に 抜ける茅花つばなぞ 召めして肥こえませ (一四六〇)

(そちのため、片時も手を休めることなく春の野で抜いておいた茅花であるぞ。これを召しあがつて、よくお

肥えなされ。

昼ひるは咲き 夜よるは恋こひ寝ぬる 合あ歡わ木の花 君きみのみ見みめや

戯奴わげさへに見よ

(二四六一)

右、合あ歡わの花と茅花つばなとを折り攀よちて贈る。

(昼は咲き、夜は恋しく抱き合つて寝るこの合あ歡わの花、ご主人だけ一人で見ると見るべきものであろうか、そちも見なさい。)

女が男よりも上に立つてゐることをはつきり言つてゐる、これは二人の夫婦關係として言へば、非常にしつくりいつてゐるということだと思ひますね。もちろん、こういう歌一首や二首でそんなことまで断定するのはけしからんことですけど、でも読者としてはそう読んだほうがおもしろい。おもしろいとわざと読むわけじゃなくて、そう読めるということですね。家持という人は、年上の女にはとても好意的だつたと思ひます。反面自分より若い女性に対しては、歌で見るとかぎりどうも素すつ氣きないんですね。不思議です。なぜかわかりません。もちろん大伴坂上さかのうえ女郎ぢやうらう、この叔母おぢいに対する憧あこれ心こころがあつた。坂上さか女郎のうらうは九州へ下つて来て、大伴旅人の身辺みへんをいろいろ世話世話してくれた人ですね。奥さんという立場たてまだつたかもしれないしそうでなかつたかもしれないけれど、幼い家持かもちをかわいがつて、字あざなを教おしえてくれたり歌うたを作つくることを教おしえてくれたわけですね。そうい



うおばでしかも非常な美人ですから、彼には一種のマザーコンプレックスふうなものがあつたにちがいない。そして、長じているんな女性たちと関係ができたときにも、特に彼が気を入れた歌を作っているというのは、紀女郎のような人ですね。紀女郎は、すでに他の男との恋愛関係、それらはでなスキヤンダルふうのものもあつた人です。そういう人が後に家持と関係ができた。彼女は初めに家持に言い寄られています。言い寄られたときに、非常に躊躇してますね。こんなおばあさんなのに、とまで言ってるわけです。

それに対して家持が、とんでもない、あなたがたとい齒が抜け、舌べろがべろんと垂れるような百歳のおばあさんになつても、私はあなたに忠誠を誓いますという歌まで、ちゃあんと書いてる。これはすごいギャラントリーです。この人は、どっちかと言つたら、自分が年下で、かわいがるれるということが好きだつたんじゃないかと思う。

だからこそ、彼の正妻になつた坂上大嬢ですね、このひとは坂上郎女のお嬢さんですけれど、この坂上大嬢との関係がほんとおもしろいのです。どなたか上代文学会の方で、そちらのほうの専門の方がもつとその辺のことを教えてくださいださつたらとてもいいと思うんですけれど、つまり坂上大嬢をお嫁さんにしました。彼女は、夫が越中の国へ下向した時にも一緒には行かず、だいぶ後になつて行つたん

ですね。だいぶ後でやつと一緒になりました。そしてその間も、彼女の母親の坂上郎女と大伴家持との間には、気持の上では非常に強いつながりがあつた。家持、やがて大嬢が越中の国へ行っちゃつた後、奈良に残つた坂上郎女の歌には、ほんとに哀れを催されます。自分の老いをつくづく嘆いています。一方、娘の坂上大嬢はどうだつたか。これが何ともふしぎな人だと私は思うんです。懐かしいお母さん宛に、歌を送つてますけれど、万葉集で見ますとですね、後ろに注が付いていて、これらの歌は、妻の大嬢に頼まれて、大伴家持が代筆した、と書いてある。自分のほんとの母親に対して、自分が歌を作れないわけではないのに、離れて懐かしさひとしおの母親に送る手紙を、亭主に代筆させているのです。こういう女の人は少ないんじゃないか。ほんとに不思議です。たとえば、稲岡君あたりに説明してもらいたいと思つていることなんです、実は。あの坂上郎女のお嬢さんが、母親に対して贈る歌とか、母親だけでなく、家持の妹さんですから、自分からすると義妹になる人、その人に宛てた手紙もあるんですが、それも家持が代筆してらるんですね。だから、今のところ私の考えでは、坂上大嬢は歌を作るのが嫌いだった。母親に時々作りなさい作りなさいと言われて嫌々ながら作っていたけども、もう書く気がしないから、亭主に代筆してもらおうといったつもりか

もしれない。しかしそういうふうには思えないところも古代人ですからありますね、よくわからないんです。そういう意味では、家持を巡る女性たちの主な人たちについていうと、それぞれが非常におもしろいんですね。

私にとつてとても大事な二人がまだいまして、その一人は、万葉の巻十六にいます。この巻にはふざけた、意図的にふざけた歌がたくさん載っていますね。まじめな学者たち、謹厳な学者たちにはあまり評判がよくないらしくって、中心的な光は当てられていないですけど、私みたいな人間はそこがおもしろいので、ずいぶん書きました。最近出しました『私の万葉集』という、講談社現代新書があります。五巻で完結したんですけど、その中で特に巻の十六は、恥知らずなくらいに、長々と書きました。その中でもスターが一人いまして、それは長忌寸意吉麻呂という人ですね。この人の歌は他の巻にもいくつも出ていて、宮廷のちゃんとした歌人なんです。けれどこの人は同時に、いくつもの器物や他の題をパパッと出されて、これらを全部詠み込んで一首の歌を作る名人でした。ちゃんと賭に勝って、お金をもらっちゃったりするということができた人。この長忌寸意吉麻呂ってエ人は、とても好きな人です。古代にも、こういう機知と実力を兼ね備えた歌人、詩人がたくさんいたんだろう、その中の代表者として、意吉麻呂という

人がいたのだと思ってるんです。

それからもう一人、これはロマンスの作者。ロマンスというのは、珍らしい、はなやかな恋物語のようなことで、それをおもしろく物語ったものですね。悲恋もあればお色気もあれば、冒険譚もあるというようなものがロマンスですね。そのロマンスの歌人が万葉集にもいて、それが高橋虫麻呂です。虫麻呂の歌は、私にはおもしろいんですけど、人麻呂などの陰に隠れて、ばつと取り上げられるというほどのものではない、と思いますが、この人の歌もいんです。特に、千葉県の中央部、上総の「末」という土地に住んでいた珠名という女性を歌った歌などは、まあ言ってみれば古代のマリリン・モンローみたいな女性ですね。その珠名娘子を歌った長歌、これは自分で直接にその人と会ったとか、その人についてのなんか聞いたとかいうんじゃない、昔こういう人がいたという形で語っています。虫麻呂は行く先々で、おもしろいものにおつかると、たぶんノートをしておいて、後で長歌にしているんですね。浦島太郎の歌も彼が作っています。浦島伝説ですね。上総の末の珠名のことを詠んだ歌というのは、いろんな男が珠名にとろけてしまい、彼女の家の前は門前市をなすばかりという、そういう女性のあだっばい姿態を描いている長歌。日本の古代以来の和歌の歴史の中で、「胸わけの 広き吾妹

腰細の「すがるをとめ」というふうな端的に、美女のあだつぽさをうたい得た歌人は、他にいないと思います。女性のすばらしい歌人たちがいます。いちばんはなんといつても和泉式部、あるいは式子内親王とかですね、何人かすばらしい女性詩人がいて、これは日本の詩歌の誇りであると同時に、全世界的に言っても、女性詩人がこれだけたくさん出た国は、あまりないと思うんですね。そういう意味では女の詩人はすばらしいんですけれど、たとえば和泉式部が「腰細の すがるをとめ」だったかどうかは全然わからない。平安朝の女性のことは全然わかりません。肉体的な描写はありませんですからね。万葉集にはそれがあつたんですね。そういう意味で、虫麻呂というのはとてもおもしろい人だと思つてます。虫麻呂のもう一つの歌、「河内の大橋を独りゆく娘子を見る歌」。河内に大きな橋が架かつていて、そこを、おとめが、一人で渡つてくる。それをただ見ている。「河内の大橋を独りゆく娘子を見る歌」つてのは、おもしろい題ですね。ふつう、ただなんとかを見る歌、ということはないと思うんですね。誰かが行きますね。それを見ているということがありますけど、それそのものをただ見るだけで、それを歌の題にし、おとめのことをそのまんま詩として歌つて、つていう詩は、古来あまりないと思うんですね。高橋虫麻呂という人は、古代人とし

てというだけでなく、日本の詩の歴史の中でも、非常に珍しいタイプの詩人です。それはどういうことかということ、要するに、ありふれた日常生活のひとつのシーンを取つてきて、そのままそれを詩にしたということ。これは柿本人麻呂にも、山上憶良にも、大伴旅人にも、ありません。日常性そのものの断片を、そのまま詩にしたという人は、虫麻呂あたりが初めて。万葉集では末期の方に近いですけど、そういう時代になってきて、人々が人間関係そのものに興味を持つようになり、その人間関係も複雑になってきた。こうして虫麻呂のような詩人が出てくる。日常生活そのものを詩にしようという人が出て来るんですね。これはとても技術的にうまいやつだ、と思います。それ以前の、人麻呂なら人麻呂の歌に、妻なら妻のことを書いてあつてもですね、こういう細かいこと、妻が今歩いているといったようなことだけで詩を作るようなことはなかったわけです。かならずそれが生とか死とか、重大なものとかつづくわけですね。ところが虫麻呂の詩ではそんな具合にはくつついてないのです。虫麻呂の場合は一種のスナップショットをばつとやるのです。カメラで言えば、非常に簡単に、スナップを撮つていく。その角度が実にうまい。そういう人だったと思います。

今の「河内の大橋を独りゆく娘子を見る歌」つていうの

は、あのう、原文を読むとめんどうですから、私が、現代語に訳したのをちよつと、読んでみます。

シナデル片足羽川に架かっている朱塗りの大橋、その上を、紅染めの赤裳を長く引き、山藍で青く染めた上着を着て、ただ一人渡ってお行きあの可愛い娘さん、ワカクサノ夫があるのだろうか、それともカシノミノ独りで寝ているのだろうか。問いただしいと思ふ可愛い娘の、家を知らないことよ。〔一七四二〕

いくつか、ここに、枕詞があるんですね。「しなでる」とか、「若草の」とか。「若草の」は夫「つま」、に掛かる枕詞ですね。「しなでる」ってのは「かた」に掛かる。それから、「かしのみの」ってのは、櫃の実は一個で、それと同じように独身でつてことですね。で、そういう、三つばかり、枕詞を使っています。枕詞というのはこれまた論じるとものすごくおもしろい問題がいつばいあるだろうと思ひますが、ちよつともう今日はお話しできないんですが、概して時代が下がってくると、ま天平時代あたりになると、枕詞を短歌の中で使うことが少なくなりまして。長歌では、少なくとも大伴家持の長歌などでは、かなり意識的に枕詞を使っています。しかしその枕詞の質が、たとえば柿本人麻呂の場合とは全然違っていると私は思っています。そういう枕詞も、使い方によって、とてもいい詩になるものもある。

おもしろい問題がありますけど、とりあえず、今の虫麻呂の歌についていこうとですね、たいして長くない歌ですが、

「しなでる 片足羽川に架かっている朱塗りの大橋、その上を、紅染めの赤いスカートを長く引き、山藍で青く染めた上着を着て、ただ一人渡ってお行き、あのかわい娘さん。若草のつまはあるのだろうか。それとも櫃の実の、独身で一人寝ているのだろうか。問いただしいと思ふ可愛い娘の、家を知らないことよ。」ってただそれだけの長歌なんです。つまりこれはほんとに断片です。生活の断片をそのまま詩にしてるんですね。でこういうことというのは、いつたいなにかといえ、つまりなんの特異性もない、なんの特別なこともない、ということに新しい意味があるわけです。何でもない日常の一断片を詩にしてる、という意味では、万葉集の中で、逆に独特なんです。万葉集でも、まだこれ以前までは、行動に対して理由が付くわけですね、いろいろと。たとえばその女の人と自分とがどういう関係だとかいうことがある。しかしこちらは、関係がない、知らない人を、ただスケッチしてるだけです。そういう意味では、まあ、気がないとか、そんな歌でもあると思います。でもそこが新しかったのです。風俗描写と言つていいのですが、風俗を書くことが、実は天平の頃から始まつてるのです。それ以前は風俗を書いてません。風俗

を書くようになってからは、どんなものでも、おもしろいと思つたらすーつと書いてちやう。おもしろいことと、なぜそうなるかということとの間に、強い関係がない。ただパツと見て、ああおもしろい、と思う。他の人が読んでもああおもしろい、と思う。他の人が読んでもああおもしろいなあ、つて思えば、それでいいんです。そういうふうな歌は、天平以前には、ほとんどまつたくありません。人間関係が、それだけ変わつてきてるんですね。ひとりひとりの姿を書くにも、自分とその人との関係といつたことが重くのしかかつていないで、すーつと目の前を通り過ぎたものをそのまま描いてゆく。これが、天平時代に、日本の詩歌に起きた新しい現象だと思つたのです。その代表選手の一人が、高橋虫麻呂だと思います。この虫麻呂のような人は、それ以前の時代の長歌には、一人もいません。

マイナーポエツトとありますが、柿本人麻呂がもしメジャーポエツトならば、ここにマイナーポエツトがいて、マイナーポエツトのよさつてのもいっぱいあるんですね。十九世紀あたりのフランスの例を引けば、フランスの絵描きの中にも、虫麻呂の書いた、この橋を渡つて行く姿、こういう描き方をしている絵描きが、だいぶ出てきますね。そしてそういう絵描きたちが、二十世紀まで

続いている。印象派、それから後期印象派あたりの絵描きたちは日本で一番人気がありますが、その人々の描いた絵というのは、いわば虫麻呂が書いたような長歌と、非常に近いわけです。橋を一人の女性が渡つて行く。雨がさつと降つてきた、彼女がどういう格好をして、橋を駆け抜けていったかというようなことだけ描くだけでもおもしろい、となつてくるのは、印象派の絵からですね。その印象派に影響を与えたのが日本の浮世絵。印象派の絵は、人間の生活情景をさまざまな形でとらえてきました。それが日本人にも非常に受けるんですね。印象派の絵がこれほど受ける国は、日本しかありませんけど、そういうことと、並行するように高橋虫麻呂のような歌がですね、その後、ずつと書かれてきた。それがきちんとした定型になつたのが、俳句つてものですね。俳句は全部それです。ですから、日本人が俳句を好きだつてことと、印象派の絵が好きだつてことと、それから高橋虫麻呂のような人を、おもしろがることとの間には、つながりがあります。もし虫麻呂をおもしろがつていないなら、それはつまり万葉集を知らない、日本人自身があまり知らないからだ、ということにもなるかもしれない。そういうことを知らしめるためには、いろんなことを、明らかにしていく必要があります。まあ、こういう学会などで、そういうシンポジウムみたい

なものを連続してですね、万葉集の天平時代の風俗描写についてとか、そういうのでやったらおもしろいことができるかしらん、というような、気がするくらいであります。ほんとうは、ここまですが前置きで、これから、枕詞やなんかの話をもやろうと思っただけで、全くだめでした。申し訳ありません。すいませんけどこれで、もう時間が、ちよほど来たんですね。おしまいにさせていただきます。

(拍手)